

広域 文化・暮らし 特集

透明な力を 第4部 古里を離れて(1) 不安な入学式 卒業は笑顔で

東日本大震災で古里を離れなければならなかった子どもたちは、新たな土地でどんな日々を送ってきたのか。宮城県石巻市から仙台市に引っ越した3姉妹の3年の軌跡をたどる。(震災と子ども取材班) = 第4部は5回続き

笑顔でこの日を迎えられるなんて、3年前は想像できなかった。

8日、仙台市宮城野区の宮城野中。卒業式を終えた遠藤桃華さん(15)は、大好きなクラスメートとじゃれ合って写真を撮り、中学校生活の最後の日を惜しんだ。

震災で石巻市鹿妻南の自宅が住めなくなった。仲の良かったいとこ3人を津波で失った。

震災発生から1カ月後、父伸太郎さん(42)と母桐恵(ひさえ)さん(42)、姉悠華さん(16)、妹裕美さん(11)の5人で仙台に引っ越してきた。

気持ちの整理もつかぬまま慌ただしく臨んだ中学の入学式。「友達はできるんだろうか」。心配でたまらなかった。

悪い予感的中した。教室では、学区内の出身小学校ごとにグループができていた。

ぼつんとしていると、母が廊下を歩いてきた。独りぼっちの姿を見せたくない。クラスメートの輪の中に無理やり入って取り繕った。学校が始まる前、「石巻弁」が出てばかりにされないようにと、自己紹介を姉妹で何度も練習した。結局、名前しか言わなかったのに、イントネーションが変だったのか、笑われた。

石巻に帰りたい。小学校の友達に会いたい。何で仙台に来たんだろう。でも、両親には何も言えなかった。

「仙台に連れて来てよかったのだろうか」。桐恵さんは、無理して明るく振る舞う娘がかえって心配になった。

しばらくして心を許し合える友達ができると、桃華さんはやっていけそうな自信が出てきた。

「名前、同じだね」。偶然、漢字も同じ名前のクラスメートがいて、声を掛けてくれた。2人でバドミントン部に入った。「モモ」と呼び合った。

震災のことも話した。石巻の友達の写真を見せると、「私も石巻に行きたいな」と言ってくれた。石巻の花火大会に一緒に出掛けたりした。

持ち前の笑顔が戻った。クラス替えなどで独りぼっちになっている人がいると、積極的に話し掛ける。入学式の時のさみしさを思い出し、放ってはおけない。卒業文集のアンケートで、「クラスを明るくしてくれた人」の1位に選ばれた。

それでも、古里を離れた悲しみが消えたわけではない。できるならば戻りたい。

卒業式が終わって家に帰り、石巻の友達にメールを送った。

<卒業式お疲れ。春休みに小学校のクラス会やろうね>



卒業式後、友人と笑顔で写真に入る桃華さん(中央右)

2014年03月17日月曜日

宮城 文化・暮らし 特集

透明な力を 第4部 古里を離れて(2)家族5人で 安らげる場へ

夫と長女の安否が分からない。余震が続く避難所で、娘2人を抱き寄せた。「残った3人で生きていこう」。一時はそんな覚悟もした。

2011年3月11日。宮城県石巻市鹿妻南に住んでいた遠藤桐恵(ひさえ)さん(42)は、市内にある勤務先の信用金庫から自転車で自宅に戻り、次女桃華さん(15)と三女裕美さん(11)が通っていた小学校に急いだ。

「津波が来る」。悲鳴が上がる。バキバキと家がなぎ倒される音。必死にペダルをこいで難を逃れ、2人に会えた。

「友達と遊びに行ってきたま〜す」。長女悠華さん(16)はのんきな書き置きを残していた。無事を祈るしかなかった。

仙台市で働く夫の伸太郎さん(42)が小学校にたどり着いたのは翌日夜。夜明け前から市内を探し歩き、隣の学区の中学校で悠華さんを見つけ出してくれた。

「どこさ行ってだの!」。怒ったふりをしながら、抱きしめた。

自宅は1階の天井まで津波が押し寄せ、ぐちゃぐちゃになっていた。家の周りには流されてきた車が折り重なり、シートをかぶせただけの遺体があちらこちらに見えた。

信じがたい知らせも入った。娘たちと年代で、しょっちゅう行き来していたおいとめいの3人が亡くなった。

避難所から毎日、仕事で仙台に向かう伸太郎さんの車に家族全員が乗り込んだ。桐恵さんは、5人が一緒になければ不安だった。

浸水を免れた自宅2階で片付けをしていた3月末、津波注意報を告げるサイレンが鳴った。

まとめていた荷物に気をとられ、すぐに逃げようとしないう桐恵さんに、伸太郎さんが怒鳴った。「何やってんだ。早く逃げる」

家族が離れ離れの時に、また大きな地震があったら耐えられない。伸太郎さんは、職場がある仙台にとりあえず引っ越した方がいいと思っ

た。仙台市中心部に空き部屋を見つけることができた。「ここには津波、来ないよね」。娘たちが少し安心して眠れるようになったのが何よりだった。

伸太郎さんも桐恵さんも石巻育ち。地元を離れることにはためらいがあった。仙台の学校に休まず通う娘たちの姿に「もう振り回せない」とも感じた。そのまま住み続けることになった。

震災発生から3年が過ぎたこの15日、裕美さんの誕生会を開いた。3年前は避難所で菓子パンをケーキ代わりに祝った。失いかけた家族の笑顔がある。それだけでいい。桐恵さんはしみじみ思った。



裕美さんが仙台で誕生日を迎えるのは3度目。ごしちも家族みんなでお祝いをした。=15日

2014年03月18日火曜日

宮城 社会 特集

透明な力を 第4部 古里を離れて(3)狭い家で工夫 母の日は特別

母の日の「サプライズ」は遠藤家の恒例行事だ。住むところが変わり、家が狭くなっても、3姉妹は続けたかった。

昨年5月の日曜日。「ママ、文房具屋さんに連れてってよ」。末っ子の裕美さん(11)＝榴岡小5年＝が、母親の桐恵(ひさえ)さん(42)を誘い出した。

2人が出掛けると、長女悠華さん(16)＝仙台東高1年＝がケーキ作りに取り掛かり、次女桃華さん(15)＝宮城野中3年＝は近所のスーパーに買い出しに走った。

遠藤さん一家は宮城県石巻市鹿妻南にあった自宅が津波で被災。それから1カ月後、父伸太郎さん(42)の職場がある仙台市宮城野区に引っ越した。2度の転居を経て、JR仙台駅東口近くの賃貸マンションで暮らす。

震災発生5年前に買った石巻の家は2階建てで、リビングのほかにも部屋が四つあった。

宮沢賢治の「注文の多い料理店」をまね、「髪をとかしてください」「ワンピースを着てください」といった指示書をあちこちに置いたりする凝った企画もできた。

みなし仮設は2LDK。大がかりな仕掛けはできなくなったけれど、3人は母への変わらぬ感謝を伝えたかった。

部屋にこっそり隠していた花束を、戻ってきた母親に贈った。桐恵さんは娘たちの作戦に気付いていた。でも、うれしくて驚いたふりをして歓声を上げた。

6畳の洋室が3人の寝室だ。布団を敷き詰めて寝る。周囲には洋服や学校の道具があふれる。リビングは夜、桐恵さんの寝室に変わる。伸太郎さんが4畳半の和室を仕事部屋兼寝室として使っている。

勉強場所の確保にも苦労した。家に学習机を置けるスペースはない。高校受験を控えていた悠華さんは、キッチンにご飯を敷いて小さな机に向かった時もあった。

仙台駅前の複合ビルに見つけた図書室には、「自習場所ではありません」と貼り紙があった。足を延ばした別の図書館は、人が多くて落ち着かない。

市の広報紙で復興支援のNPOが学習スペースを提供しているのを知った。週3、4日、放課後に3人で通い出した。

ボランティアの大学生が指導してくれる。「お兄さん、お姉さんが優しく教えてくれるんだ」と裕美さん。勉強が終われば、学校の出来事や石巻の思い出話に花を咲かす。

環境が大きく変わり、寂しい思いもしているのに、3人は愚痴やわがまを言わなかった。「けなげに頑張る姿を見て親も元気をもらっている」。伸太郎さんと桐恵さんはそう感じている。



復興支援のNPO「アスイク」の学習スペースで自習する裕美さん(右)と悠華さん(1月中旬、仙台市宮城野区)

2014年03月19日水曜日

宮城 文化・暮らし 特集

透明な力を 第4部 古里を離れて(4) 3姉妹の望郷 時がたち三様

黄色の外壁が3人のお気に入りだった。傷だらけになった玄関の扉を開け、足を踏み入れると、懐かしい匂いがした。

遠藤悠華さん(16)＝仙台東高1年＝と桃華さん(15)＝宮城野中3年＝、裕美さん(11)＝榴岡小5年＝の3姉妹は昨年8月、津波で被災した宮城県石巻市鹿妻南の自宅を久しぶりに訪れた。

お盆明けに解体されることが決まっていた。震災前の5年を過ごしたわが家。穏やかな日々の思い出が次々よみがえる。

友達が集まる「たまり場」だった。リビングのカーテンを閉め切ってお化けごっこをした。友達が来るたびにパンケーキを作って食べた。

母桐恵(ひさえ)さん(42)が庭でイチゴやハーブを育てた。木工家の伯父が造ったウッドデッキがあった。津波で亡くなった3人のいとことスイカ割りやバーベキューをした。

津波は1階天井まで押し寄せた。まるで洗濯機でかき回したように部屋の中はめちゃくちゃになり、柱だけが残った。

一家で安心して暮らせる場所を求め、父伸太郎さん(42)の職場がある仙台市宮城野区に引っ越したのは、震災発生から1カ月後のことだった。

思い出の詰まった家がない。3姉妹はそれぞれ仙台の学校に通い、新たな土地での生活に少しずつ慣れていく。時がたつにつれ、古里への思いは三者三様に移り変わってきた。

桃華さんは昨年、石巻の北上川開き祭りの花火を仙台の友達と一緒に見た。「花火、まじやばいね」。友達が祭りに感激する姿に古里がまた好きになった。

足を運ぶたび、「このまま離れたくない」という気持ちが強まる。石巻の高校を受験しようと考えたこともある。

悠華さんは、怖い思いをした石巻で再び生活することにはまだ抵抗がある。津波を逃れて家族と離れて避難し、二晩独りぼっちで泣き明かした。仙台に引っ越す時、後ろめたさもあったが、心の痛みはまだ癒えない。

裕美さんは石巻の友達3人と文通を続ける。<ひろみちゃんが石巻に帰ってくるというわさがありますv。ある時、手紙にそう書いてあった。

桐恵さんに確認したけれど、そんな話はなかった。自分が戻ってくることを期待している友達をがっかりさせないように、どんな返事を書けばいいか困ってしまった。

「石巻は好きだけど、仙台にたくさん友達ができまし...」。古里での楽しい思い出を大事にしながら、前を向こうとしている。



石巻の家から持ち帰った表札と黄色い外壁のかけら。みなし仮設住宅の玄関に飾っている

2014年03月20日木曜日

宮城 文化・暮らし 特集

透明な力を 第4部・古里を離れて(5)完 心に傷を負う 子癒やせる人に

傷ついた子どもの心を癒やしたい。遠藤悠華さん(16)=仙台東高1年=は、震災のつらい体験を、将来の職業に生かしたいと思う。

石巻市鹿妻南の自宅が被災した。父伸太郎さん(42)と母桐恵(ひさえ)さん(42)、妹の桃華さん(15)=宮城野中3年=と裕美さん(11)=榴岡小5年=の5人で仙台市宮城野区のみなし仮設住宅で暮らす。

震災発生から2日後、家族と離れ離れになった避難所に父が迎えに来てくれた。安心感はすぐに消えた。現実とは思えない話を聞いた。

近所に住んでいた、いとこの遠藤花さん=当時(13)=、奏さん=同(8)=が津波にのまれて亡くなり、侃太(かんた)君=同(10)=は行方不明だという。

「また一緒にカラオケに行きたいな...」。外の様子が分からない避難所で、そんなことを思ったりしていた。心が張り裂けそうになった。泣き崩れた。

花さんとは同い年で、特に仲が良かった。そろって渡波中に入学した。見せ合ったテストの成績はいつも同じぐらい。友達に「見た目も性格もそっくりだね」と言われたこともある。

中学で始めた交換ノート。「好きな人ができた」。花さんから告げられた。「応援するね」と約束した。

仙台の中学校に転入し新学期が始まっても、心にぼっかり穴が開いたままだった。1人でいると落ち込んでしまう。不意に涙がこぼれ、窓の外をぼんやり眺めることが多くなった。

石巻の中学時代と同じ吹奏楽部に入ろうとしたが、ちょっとした間、練習しないだけでクラリネットが吹けなくなっていた。情けなくなった。

部員不足のソフトボール部に誘われた。運動は大の苦手。グラブのない右手で捕球し、指の骨が折れた。練習は休まず、左手だけで素振りした。フォームが安定し、大会に指名打者で出場できた。気持ちが少し上向いた。

子どもが好きで、震災前から保育士の道を進もうと思っていた。悲しい体験を経て、親しい人を亡くしたりした子どものために働きたいと願うようになった。

児童養護施設で働く心理カウンセラーを紹介するテレビ番組を見て、「こういう人になりたい」と思った。大学に進学し、心理学を専攻しようと考えている。

あの日から3年がたった11日、両親と妹と、いとこの自宅があった場所を訪ねた。祭壇にじっと手を合わせ、誓った。

「みんなの分まで頑張るよ」

(震災と子ども取材班)



震災発生から3年の11日、津波で犠牲になった3人のいとこの自宅跡を訪ねた=石巻市長浜町

2014年03月21日 金曜日